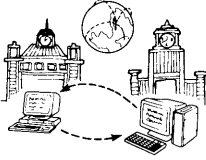


巻頭言



急速な普及期に突入したネットワーク時代における学会のあり方



高橋 延 匡†

インターネットで代表されるコンピュータネットワークが猛烈な勢いで普及している。その背景には、VLSIメモリの4倍増の世代交替に一向限界が見えないことと、パソコンやワークステーションの高性能CPUが開発され、一昔前のスーパーコンピュータを個人が持てる時代になったことがある。例えば、理工系大学では、学生たちにとってパソコンはオーディオ機器より身近な存在になっているといっても過言ではあるまい。

なぜなら、人間は食物をエネルギー源として「五感を通して情報を入力し、処理（認識、理解など）して、行動として情報を出力する」動物だからだ。その意味で communication は、人間の中心的活動であり、上記のネットワークは電話やFAXなどと同様に強力な communication の手段を提供することになった。すなわち、前者と比べてコンピュータネットワークを用いた communication は、パーソナル間の通信のみならず1対多の通信が極めて効率的に可能であるので、その潜在能力は電話やFAXなどの比ではない。なぜなら、デジタル情報として処理できるので、情報の劣化がなく蓄積効果や再利用効果が付随しているからである。

そのような状況の中で、現在、当学会の見識が問われる課題が三つある。

第一は、初等中等教育における情報処理教育のあり方についてである。「コンピュータカリキュラム委員会」が大学の情報系専門学科のカリキュラムを中心に活躍し、大学の教育改革に一定の役割を果たしてきたが、初等中等情報処理教育について、当学会からのアピールがあっただけの段階だと思う。情報処理教育のあり方が、若い人たちをして単なるコンピュータの操作教育に変質してしまっただけのものであろうかと危惧するから

である。と同時に、入試問題などで、採点のし易さから情報科学／工学の本質から遠ざかり、理科離れならぬ情報科学離れという結果を恐れるからである。

第二は、情報処理に関する倫理綱領の問題である。IFIPを中心に国際委員会からの提案であるが、先進国でこのような綱領を持たないのは日本だけのことである。この整備なくして、本格的なネットワーク時代を迎えるのは極めて危険である。なぜなら、ネットワークをはじめ、情報処理システムの多くは、「利用者は善人である」との仮定の上に成立しているからである。したがって、技術の発展を見通した上での社会科学的発想が重要である。幸い、これも研究委員会が発足の運びとなった。

第三は、電子化、ネットワーク対応化の問題である。当学会でも現在、「論文誌」や「学会誌」などの電子化の検討が始まっている。当学会の会員諸氏の感覚から言えば、情報処理を標榜している本学会が、そのような問題について他学会の動向を見てから考えようというのでは、どこかの政府みたいなもので、他学会からはなんらの尊敬も得られないのではないかと。だからといって拙速で電子化を進めようと主張している訳ではない。ことは単に情報処理学会だけの問題ではなく、日本の全学会に及ぼす影響が極めて大きいからである。したがって、単なる技術論だけではなく、個々の会員のオリジナリティの主張の面とか、学会経営の面、会員に電子化のメリットをどう還元するかなど、種々の視点からの検討をタフに行う必要がある。またその検討過程と結果を公開し、世に問う姿勢が求められていると考える。そのようにしてはじめて、社会に開かれた学会としての役割を果たすことができる。

3万人の会員の叡智が問われている。

(平成7年4月10日)

† 本会監事 東京農工大学